

## 1 授業の概要

### (1) 活動1から活動3の場面

前時の振り返りをし今日のめあてを確認した後、続きを予想して聴く場面では、「今までのところが繰り返されると思う。」「今の旋律がもう少し続いてから違う旋律が来ると思う。」という発言がみられた。A2の部分を聴いてみると、「最初とリズムが同じだけど速くなった。」「音が少し違う。」等の気づきが見られた。「この続きはA1とB1の部分のどちらに似ていると思うか。」という発問には、ほとんどの子供がA1の方に手を挙げた。理由を聞くと、「速さが違うだけでリズムが同じ。」「楽器の音が似ている。」等の発言があった。

### (2) 活動4から活動7の場面

クラスの左3列を旋律Aのグループ、右3列を旋律Bのグループにして、自分のグループの旋律が聴こえたら立つように指示してA2の部分から最後まで聴かせた。A2の部分ではAグループのほとんどの子供が立ち、B2の部分ではBグループのほとんどの子供が立った。しかしA3の部分では、立つ子供はほとんどいなかった。そして、B3の部分では立ったり座ったりする子供が多かった。最後のAとBの旋律が重なる部分では、初めは立ったが所々で座ったり立ったりする子供が多かった。

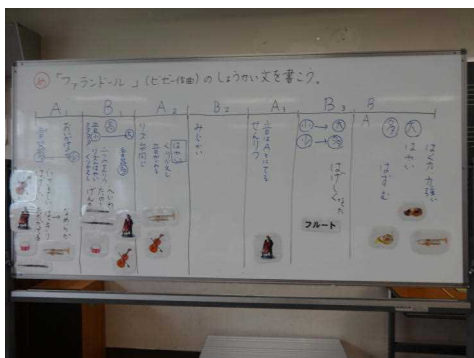
最後まで聴いた後、誰も立たなかった部分について聞くと、「Cだと思う。」という発言があった。A1とA2の部分を指で机をリズム打ちさせて旋律が同じということを確認した後、A3の部分も指で机をリズム打ちしながら聴かせた。A1とA2の部分はリズム打ちできていたが、A3の部分は大部分が拍打ちのようになっていた。ここはAの仲間かBの仲間か聞いてみると、「Aが最後の方に入っている。」「Cだと思う。」という発言があった。まだはっきりしないので、音を少し大きくしてもう一度指でリズム打ちしながら聴かせたが、また拍打ちのように叩いていた。聴かせた後、同様の発問に「最後にAが入っている感じ。」との反応だった。「少し入っているならAの仲間に入れてあげて。」と板書し、曲の最初の部分から板書を指しながら「気付いたことはありますか。」と聞いたら、「AとBの旋律が繰り返している。」「最後はAとBの旋律が重なって一緒になっている。」という発言があった。

また、A1とA3の旋律は「音の高さが違う。」と言った子供の発言から、A1とA3の部分のリズムに注目させるために、教師がA3の旋律を歌い、子供にはA1の旋律を同時に歌わせた。歌った後にリズムが似ているかどうか聞いてみたら、「微妙に違う。」という発言だった。子供にとってA3の部分が旋律Aの仲間とは言いきれないという反応であった。

その後B1、B2、B3の部分を聴き比べて、音色や速さなどの違いを共有した。最後の旋律Aと旋律Bが重なる部分については、子供から「楽器が増えて音が大きくなる。」「速さが段々速くなる。」「迫力がある。」「力強い感じ。」という発言があった。

オーケストラの演奏をDVDで鑑賞した後、この曲の特徴をまとめ紹介文を書かせた。

### (3) 音楽についての気付きを得るための手立て



#### 可視化

音楽の構造を可視化した板書



#### 比較聴取

A1とA2, A3の部分のリズムが共通していることや速さや強弱が違うことに気付かせるために、指で机をリズム打ちしながら比較聴取している場面



#### 可視化

音楽の構造に気付かせるために子供を旋律Aのグループと旋律Bのグループに分け、自分の旋律が聴こえたら立つ場面



#### DVDで映像を見ながら鑑賞

楽器の種類や演奏している人数などに着目させ、気付いたことを実感させるためにDVDで鑑賞している場面

### (4) 子供が書いた曲の紹介文

- ・この曲は、飽きなくてリズムにのりたくなってしまいます。最後のAとBが混ざったところが迫力があってリズムが速くなります。いろんな楽器の音が混ざっておもしろいです。聞いてみてください。
- ・とても勇ましくすごい曲です。とても激しいけれど、たまに優しくなったりして気まぐれな曲です。
- ・この曲は、2つのメロディーが繰り返されていておもしろいのでおすすめです。

## 2 授業をふり返って

### (1) 参観者から

- ・めあてが「紹介文を書こう」だったが、なぜ家の人に紹介文を書かせようと思ったのか。
- 「紹介文を書く」ためには、音楽をよく聴かないといけないから。友達にではなく家の人にしたのは、他のクラスはもうこの曲を聴いてしまったから。
- ・今日の手立ての「可視化」「比較聴取」とは。
- 「可視化」は音楽のどのあたりかということを見て分かるようにするために、ホワイトボードに音楽を線で表した。また、子どもの気付きから楽器の絵カードを貼ったり強弱を記入したりした。「比較聴取」はそれぞれの変化に気付かせるために、A1とA2, A3, A4というように同じ旋律の仲間で聴かせた。
- ・DVDを見せた意図は？
- 演奏している楽器や人数を確認しながら音楽を聴き直すため。
- ・旋律Aのグループと旋律Bのグループに分けて立たせたり座らせたりしたところは、あやふやな子がいたからもう1回やってもよかったのではないか。そして、最後のAとBが重なるところは、子供たちが「AとBが重なってる」ことを実感して納得出来ればよかった。A3のところも立っている人もいたけれど立っていない人もいたし「Cじゃないか。」と言っていた子もいたので、もう1回聴かせてもよかった。そしてAの旋律とリズムが同じということに気付かせればよかった。
- ・A3のところでは子供たちが迷うのは予想できていたことで、他の部分は子どもたちは聴き取れているので、発問を焦点化してそこを重点的にやればよかった。
- ・子供たちにリズムが同じということの根拠として、3年生には楽譜を示すという手立ても考えられる。
- ・AとBにタイトルをつけさせても面白いと思う。

### (2) 共同研究者 弘前大学教育学部 今田匡彦先生から

- ・この題材は鑑賞とサウンドウォーク<sup>\*1</sup>と音楽づくりを関連させてもできると思う。例えば、サウンドウォークをして「ファランドール」の鑑賞をしてから、Aの人とBの人がそれぞれのリズムや旋律をつくって、強弱や速さを変化させて、ファランドールと同じ構造（A1→B1→A2→B2→・・・最後重ねる）で演奏させるのも面白いと思う。  
（本研究部では、これまでに表現と鑑賞の活動を関連させた題材構成の基で、中心となる音楽を形づくっている要素を焦点化することにより、子供が見通しをもち、題材全体を通して音楽的な見方・考え方を働かせながら学習を進めることができるような授業研究を行ってきた。）
- ・A3のところ、「C」と言った子供が多かったので、どうして「C」だと思ったのか、みんなで考えを出し合って聴き直したりさせるとよかった。

---

\*1listeningwalk はシェーファーが考案した音のエクササイズの一つ。ある一定の時間、誰ともしゃべらずに一人の空間を維持しながら環境の音を聴く活動。soundwalk はほぼ同じ活動を指すが、後者はあらかじめ音環境を調査しコースをデザインするリーダーとリーダーのコースに従って歩く参加随行者という二つの役割に分かれている。今田匡彦『哲学音楽論音楽教育とサウンドエスケープ』恒星社厚生閣,2015,p33

### 3 成果と課題

#### (1) 成果

本実践における成果は、聴き方を更新していくために、音楽についての気付きを得るための手立ての有効性が明らかになったことである。手立てとして音楽をホワイトボードに線で示し可視化することで、音楽の構造を理解することができた。また、A1とA2というように部分ごとに比較聴取させたことで旋律の共通点、音色や強弱等の違いに気付かせることができた。

#### (2) 課題

本実践における課題は、子供に気付かせたいことを焦点化させる手立てが不十分であったことである。子供が旋律Aの仲間なのか、また別の旋律なのか迷う場面があった。2つの旋律のリズムに焦点化し、根拠をはっきりさせ旋律Aの仲間であるということを実感させることが必要であった。そのためには、同じ部分を再度聴かせる、聴きながら机をリズム打ちさせる、楽譜を示すなどの手立てが考えられる。子供が実感を伴って音楽を捉えて聴き深めるていくことができるような多様な手立てについて研究を深めていく必要がある。